第３章

～授業のスタイルと講師・学生の関わり方～

授業計画（シラバス）は、次の記述にあるように、授業の目的、到達目標、授業内容・方法、1 年間の授業計画、成績評価方法・基準等を明らかにしたものであり、統一した書式を用いて作成され、予め学生に公表されるものである。

授業プランは、特定の講義回においてどのような授業が行われるかを示したものである。

本章では、外部人材としてのキャリア・コンサルタントが大学でのキャリア教育を担当するために必要な情報という観点から、授業計画（シラバス）について説明する。

1　授業の構成と授業づくりの基本

・授業づくりの基本型としては、全体を、導入、展開、まとめの 3 つのパートに分けて構成する方法がある。

(1)　導入のパート

・授業を担当する教員と受講する学生が、スムーズに授業に入っていくことができるようにする。

・より良い授業を行うために、以下の点に留意する。

①快適な雰囲気で始める：クラスと教室の快適な雰囲気をつくるために、あいさつや雑談等で学生の緊張をほぐしたり、教室の換気、室温の調整、マイクの確認、黒板の清拭等を行い、準備が整ったところで授業の開始を伝える。

②学生の興味や関心を喚起する：導入部分では、学生を引き付け、興味を向けさせるために、例えば、授業内容に関する最近のニュースを紹介する、データを提示する、簡単なクイズを行う、刺激的な質問をする等の工夫をする。

③学習目標を知らせる：その日の授業を通して、学生が何を学び、どのような知識や技能を獲得することを目指すのかを伝える。

④学生の準備状況を確認する：その日の授業の内容を理解するために必要な知識や技能を学生が有しているかを確認する。前回の授業の内容と関連する場合には、前回の復習から入ることも効果がある。

⑤アウトラインを紹介する：その日の授業を構成する内容、それぞれの目的、相互の関連性等を伝える（口頭による説明、配付物や板書を使用した説明等）。

(2)　展開のパート

・授業の本体部分となる、最も重要でかつ長いパートであるため、学生の学習に対する集中力を持続させるための工夫が必要になる。

無断複製・頒布を禁じます

・展開のパートを構想する際には、次の点に留意する。

①内容を精選する：1回の授業で学生が消化できる（理解できる）情報の量には限度がある。そのため、学生にできるだけ多くのことを伝えようとして、たくさんの内容を詰め込み過ぎると、学生が消化不良を起こしてしまうことになる。その日の授業のテーマにおいて重要なものは何か、何を学生に伝えたいのかを整理することが重要になる。

②内容を順序良く配列する：学習する内容について、まとまりをもったいくつかの部分に分けた上で、それぞれを順序良く繋げていく作業が必要となる。単純なことから複雑なことへ、古いことから新しいことへ、身近なものからそうでないものへ、既知のことから未知のことへ等、学生が理解しやすい配列を考えて説明する。

③ハイライトを演出する：その日の授業の中で最も重要なこと、学生に伝えたい（理解してもらいたい）ことについては、例えば「ここが今日のポイント(一番大事なところ)です」と直接伝える、内容を繰り返して話す、板書の色を変える等の工夫をして学生に伝える。

④学習方法を工夫する：学生の集中力を維持するために、学生に質問する、写真・図・映像を見せる、ディスカッションさせる、グループワークを行う等の様々な学習方法を採り入れる。

⑤学習の進み具合を確認する：学生が授業を理解し、授業の進行についてくることができているかに留意する必要がある。内容的に理解しづらいと考えられる箇所ばかりでなく、学生の表情等から判断して、学生の理解状況を確認する必要があると判断した場合には、学生に質問したりして、理解度をチェックする。

⑶　まとめのパート

・授業の成果を高め、学生の満足度を上げるためには、振り返りとまとめのパートの時間を確保し、充実した内容にすることが求められる。

・まとめのパートを構想するには、次の点に留意する。

①内容の定着を図る：授業の内容を振り返り、重要なポイントが何であったのかを確認させる作業を行う。重要なポイントが複数ある場合には、相互の関連性についても説明し、学生が理解を整理しやすくする。

②学習の成果を確認する：質問やクイズ等の方法によって、学習の成果を確認する。コメントペーパー（振り返りシート）や小テスト等を使用して、出席状況の確認とともに学習成果を確認する方法もある（振り返りシートなどは、添削した上でコメントをつけて返却すると学生の取り組む姿勢が向上する）。

③達成感を与える：導入のパートで最初に示した学習目標がどのように達成されたのかを説明する。学習目標の達成が確認されたら、学生の努力を認め、ねぎらうことも効果が高い。

④その後の学習に繋げる：次回の授業に繋げるために、学んだことの復習、発展的な学習のための参考文献等を示すとともに、次回の授業の項目を伝え、どのような予習をしてくるべきかを知らせる。

（参照：夏目達也・近田政博・中井俊樹・齋藤芳子『大学教員準備講座』37頁以下玉川大学出版部 2010年）

無断複製・頒布を禁じます

2 授業プランに盛り込む内容

①授業のタイトル・担当講師
②授業カリキュラム全体における位置付け
③授業の学習目標
④本日のメニュー・キーワード
⑤タイムスケジュールと授業スタイル
⑥導入部のシナリオ
⑦展開部のシナリオ
⑧まとめのシナリオ
⑨教材・配付資料の項目と内容
⑩振り返りシート・確認テスト
⑪復習のテーマと発展学習
⑫予習のテーマ

3 授業プランの作成フォーム例

一　授業計画上の位置付け		
1	科目名：	担当講師名
2	開講時期	年次：１・２・３・４年次 開講期：前期(春学期)・後期（秋学期） 回数：(全体で 15 回のうち)　　コマ目
二　授業のタイトルと内容、学習目標（ねらい）		
1	授業のタイトル名	
2	授業のキーワード(3 つ)・内容	
3	この授業の学習目標（ねらい）	
三　使用する教材・レジュメ		
1	教材	
2	レジュメ	
3	振り返りシート（学生が記述する項目・内容）	
四　授業のタイムスケジュール（時間配分）と授業スタイル（実施方法）		
1	導入部のシナリオ	
2	展開部のシナリオ	
3	振り返りとまとめのシナリオ	
五　復習のテーマと発展学習		
1	復習のテーマ	
2	発展学習	

無断複製・頒布を禁じます

4　大学における代表的な授業のスタイルと学生の取組み

・授業のスタイルには、様々なものがあるが、授業の目的との関連で、どのような授業スタイルが適しているかが判断される。
・授業時間で、複数の授業スタイルを組み合わせて実施したり（例：講義形式とグループワーク形式によるブレインストーミングを併用する等）、ある授業スタイルの中に他の授業スタイルを採り入れて実施する（例：講義形式の授業において、講義の途中で学生に質問をする等）ことも学習効果を高める。

(1)　講義形式

・講義形式の授業は、多くの情報を、多くの学生に、限られた時間内に伝える際に用いられる方式で、教員が自分の研究成果を学生に知識として伝授するのに適している。
・講義形式の授業における短所は、一方通行的な情報の伝達になりやすく、受講している学生が受動的、消極的になりやすく、自発的な学習活動を抑制してしまう点であり、そのことから、教員が学生の理解度を把握するのが難しくなる。
・講義形式の授業においても、教員が一方的に知識を伝えるだけでなく、学生に質問をすることで双方向性の授業に変容させたり、ビデオ等の視聴覚教材を用いたり、ゲスト・スピーカーを招いた講演や対談を実施することで、受講する学生の興味や関心を高めることが可能になる。

(2)　学生が主体となる授業形式（アクティブ・ラーニング）

・アクティブ・ラーニングとは、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法をいう。学修者が能動的に学修することによって、認知的・倫理的・社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決型学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である
（参照：中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び　続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」（答申）2012 年 8 月）。
・学生が参加する授業形式としては、演習（ゼミナール）、ワークショップ、チュートリアル等があり、学生が体験する授業形式としては、フィールド活動（フィールドワーク）、教室でもできる体験等がある。
・体験学習には、学生を実体験によって学ばせる学習方法だけでなく、学生の過去の経験や知識と結びつけて考えさせる経験主義的な学習方法もある。

①演習（ゼミナール）
・大学・大学院等で、教員の指導の下に学生が研究・発表・討議を行うことを主眼とした、少人数の授業の形式

②ワークショップ
・講師や教員から一方的に話を聞くのではなく、参加者が主体的に論議に参加し

無断複製・頒布を禁じます

たり、言葉だけでなく身体や心を使って体験したり、相互に刺激し合い学びあう、グループによる学びと創造の方法

（出典：中野民夫『ワークショップ』岩波新書 2001 年）

③チュートリアル

・チューターと呼ばれる指導教師と学生が一対一または一対少人数で行う個別の指導法。通常、週 1 回程度の頻度で定期的に設けられることが多く、主として学習指導が中心であるが、生活全般のアドバイス等が行われることもある。

（出典：今野・新井・児島編（冨田福代執筆）『新版学校教育辞典』教育出版 2003 年）

④PBL（Problem-based Learning 又は Project-based Learning の略語であり、問題解決型授業、問題基盤型学習等と訳されている）

・教員が設定する課題や地域特有の課題、企業等におけるプロジェクト等の具体的な事例を題材として、学生自身が課題・問題を解決するための方法を考える等の能動的な取組みを促す教育方法をいう

（参照：中央教育審議会（答申）「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」35 頁 2011 年 1 月）

⑤ロールプレイ（シミュレーションゲーム）

・現実に起こるであろう場面を想定し、複数の人がそれぞれの与えられた役割（ロール）を演じて擬似的な体験を積み、その事象が実際に起こった時に適切な対応ができるようにするための方法。

・解決すべき課題について、問題場面の状況を設定し、登場人物の役割を演じる中で、役割としての立場を理解したり、気づかなかった問題点を発見する等、現実の場面に対処する問題解決能力を身に付けることができる。その効果として、問題場面に対する洞察力が高まり、知識としての理解だけでなく、共感的な理解ができるようになり、自発性や自主性、創造力が高まることが期待できる。

・キャリア・コンサルティングの場面でも、状況を設定し、その中でどのように演じるかが学習の成果として反映される方法が取られている。

⑥グループワーク（協調学習、協働学習）

・学生同士のコミュニケーションを重視し、学生の自律的な知識構築を授業の目的とする場合に適しているとされる方法。

・キャリア教育において、グループワークは、ソーシャルスキルの中核ともいえるコミュニケーションスキルの重要性を体験的に理解する方法として重要な位置を占めている。

・学生の場合、コミュニケーションスキルが十分でない場合が多いため、グループワークを実施する際には、導入（インストラクション）、ワーク（エクササイズ）、振り返り（シェアリング）等の各場面で、配慮が求められる。

ｉ導入（インストラクション）：エクササイズのねらいや内容、条件、留意点などを丁寧に説明することであり、参加への理解を求め、参加へのモチベーションを高めるのを目的とする。これは、メンバーのリーダーに対する信頼感やメンバー相互の信頼感および自己発見を促進する。

無断複製・頒布を禁じます

ⅱワーク（エクササイズ）：体験学習の課題のことであり、本音と本音の交流を促進する誘発剤（触発する素材）である。エクササイズには、自己理解、自己受容、自己表現・自己主張、感受性、信頼体験、役割遂行という 6 つのねらいがあり、メンバー相互の本音と本音の交流を通して感情、思考、行動という 3 つの変容をめざす。

ⅲ振り返り（シェアリング）：メンバーがエクササイズに取り組んで感じたことや気づいたことを共有することであり、1 つないし複数のエクササイズを展開した後で行う平均 10 分から 15 分程度の「シェアリング（ショートシェアリング）」と、1 セッション（約 90 分から 2 時間）全体をあてる「全体シェアリング（ロングシェアリング）」に区別される。構成的グループ・エンカウンターの中で、エクササイズと同じかそれ以上の比重を持つもので、エクササイズと補完的な関係にある。

（参照：國分康孝・片野智治『構成的グループ・エンカウンターの原理と進め方』108 頁以下誠信書房 2001 年）

・グループワークを行う際、担当講師は、学生の自発的な行動を待つだけでなく、積極的・能動的な働きかけを行うことが求められる（詳細は Part2 第 4 章）。

⑦ケーススタディ

・現実に起こり得る問題や実際に起こった問題等を参考に教材として狙いを明確にした事例を作成して学生に提示し、問題点を分析させ、状況の把握、原因の分析、解決策の検討、結果の予測等を考えさせる学習方法である。

・結論そのものよりも、結論に至る過程における討論に重点がおかれ、現実の場面で求められる分析力、判断力、課題解決能力、役割遂行能力等を体験的に養うシミュレーション的学習である。

⑧ブレインストーミング（自由連想法）

・メンバーが自由にアイディアを出し合うことによって、相互交流の連鎖反応や発想の誘発を期待する方法。

・この方法は、学生の思考プロセス（ある課題についてどのように考えるか）を知るのに適しているとされる。

・ブレインストーミングでは、結論厳禁（判断や結論を出さない）、自由奔放（奇抜な考えやユニークなアイディアでも否定しない）、質より量（なるべく多くの考え方やアイディアを出す）、結合改善（アイディアを結合したり、変化させたりして新たなアイディアを作っていく）という 4 つの原則がある。

（参照：川喜多二郎『発想法』59 頁以下中公新書 1967 年）

⑨KJ 法

・カードを使用して、問題の構造的理解や問題解決、創造性開発のために行われる問題分析のための技法。

・具体的な方法としては、問題の解決策について、それぞれが小さなカードに自分の考えを書く、グループ全員のカードを集めて似た感じのカードをまとめてグループ化する、グループの意見を代表するタイトル（表札）をつける、模造紙にカードを貼り付けグループ間の関連を矢印で示す等して問題の分析や解決策について論理的にまとめる

（参照：川喜田二郎『発想法』中公新書 1967 年）。

無断複製・頒布を禁じます

⑩ディベート

・ある論題（テーマ）について、肯定派（賛成派）と否定派（反対派）に分かれて一定のルールに従って討論をし、論証の強さを第三者である審判団が判定する学習活動。

・ディベートでは、自分の立場をはっきりさせて筋道立ててきちんと話す力、相手の立場や意図を考えながら話の内容を的確に聞き取る力、相手を論破するために的確な質問をする力などが求められる。

5　大学教育の質的変化と学習目標・授業の組立て

(1)　大学教育の段階と大学での教育目的

①エリート段階：大学進学率が 15%未満（日本では、第二次世界大戦前の状況）

教育目的：人間形成（人格の陶冶）・社会化、エリート・支配階級の精神や性格の形成

②マス段階：大学進学率 15%以上 50%未満（1960 年代以降の日本）

教育目的：知識・技能（実務的能力）の伝達、専門分化したエリートの養成＋社会の指導者層の育成

③ユニバーサル段階：大学進学率 50%以上（2009 年以降の日本）

教育目的：産業社会に適応できる国民の教育

(参照：マーチン・トロウ（天野郁夫・喜多村和之訳）『高学歴社会の大学』65 頁以下東京大学出版会 1976 年)

(2)　大学教育の段階と学習目標、学生の授業への関わり方

・エリート段階においては、少数の限られた学生を対象とするエリート型の高等教育であり、学習スタイルのイメージは、「師弟関係」における修行モデルをベースにし、主体的な学びが期待されている。

・マス段階においては、学生数が増大し、高等教育が大衆化していく中で、学習スタイルのイメージは、「教師＝学生関係」のもと、テキストで学ぶことが一般化し、学びが受動化していく。

・ユニバーサル段階においては、万人が教育を受ける機会の保障や教育の効果の明示化と保証が求められる。教育は、サービス財として消費の対象になり、学生は、「契約関係」のもと、消費者として位置づけられる。学生は、情報をゲットし、学生生活をエンジョイするには熱心だが、学ぶ意義や学びの主体性を喪失した学生が増加する。

（参照：島田博司『学びを共有する大学授業』26 頁以下玉川大学出版部 2012 年）

無断複製・頒布を禁じます

【大学教育の段階と学習目標・学生の授業への関わり方】

項　　目	エリート段階	マス段階	ユニバーサル段階
学習目標	人間形成・人格の陶冶 修養・悟り 名誉・栄誉・栄冠 自己鍛錬（精進） 真実の探求（何が真実か）	知識や技能の獲得 学力 立身出世 勝利・成功 事実の探求（何が事実か）	自己可能性の開花 生きがい 自己充足・自己満足 自分探し・自己発見・自己実現 過去や将来の模索(何に役立つか)
学習態度	生真面目 涙ぐましい努力 要領をつかむ	真面目 地道な努力 要領を教わる	非真面目・脱真面目 無心 要領を発揮する
学習スタイル	Steal(技などを盗む) 稽古を積む・倣う 覚る（悟る） 会得・体得 修行・習道 切磋琢磨	Learn(知識や技術等を学ぶ) 練習する 覚える（憶える） 暗記・暗唱 学習 試験勉強	Get&Enjoy(情報を楽しくゲットする) ゲーム感覚でする 情報サーフィンする プレイ ラクに楽しく学ぶ やりたいようにする
授業への接し方	聴く 見入る 耳を傾ける 全身を向ける 能動的・積極的 自己関与的 授業を聴く 距離がない	聞く・受ける 見る・目をやる 耳を向ける 顔を向ける 受動的・消極的 関与的 授業に出る 距離をおかない	聞き流す・こなす 眺める・目を貸す 耳を貸す 気の向くまま 恣意的・状況的 ノリ 教室に行く 距離をおく
聴取スタイル	専念聴取 専心聴取 単メディア聴取 集中聴取 構造的聴取	ながら聴取 つまみ聴取 複数メディア聴取 並行聴取 コピー的聴取 カモフラージュ型聴取 批評的・聞き流し的・交友的・分析的批評的聴取	ながら非聴取 非聴取 マルティメディア聴取 多重聴取 娯楽消費的聴取
学生の受講態度	静粛 メモ私語	私語 口頭私語・会話私語	無語・喧噪・避語 ケータイ・メール私語
ノート：意味 様式 とり方 主体 保管感覚	テキスト 自筆ノート ノート取り テキスト作り 自主的・自発的 自分 キープ	ノート コピーノート ノートづくり 自分たち ファイル	メモ 電子ノート ノート編集 要約・要点 他律的・他人任せ だれでもかまわない 使い捨て
授業への出席	意志	義務	権利

（資料出所：島田博司『学びを共有する大学授業』28 頁以下玉川大学出版部 2012 年を参考）

無断複製・頒布を禁じます

【大学教育の段階と教師の授業への関わり方】

項　　目	エリート段階	マス段階	ユニバーサル段階
教育スタイル	Training(訓練する) 模範を示す 背中を見せる Education	Teaching(教える) 指示通りにさせる テキスト(教科書)で教える Instruction	Scaffolding(足場づくりをする) Care&Cure(ケアし癒す) サポートする 材料(素材)へのアクセスを用意する Edutainment/Infortainment
教育の方向性	教導・訓導・教化 感化・伝授	知識や技能の伝授 教授・教え込み	サービス提供 情報提供・影響
教育目標	社会化 理論構想 知は力なり	人材の選抜と配分 理論化 記憶は力なり	幅広い経験の提供 理論から実践へ 想像（創造）は力なり
カリキュラム	鋼構造的	柔構造的	非構造的・弾力的
教育方法	個人指導 板書 チューター制 ゼミナール制 個人作業	集団指導 プリント・OHP・コピーボード 補助的ゼミ マスプロ授業 個人別集団作業	個別指導 マルチメディア マルチメディア利用 少人数授業 集団内個別作業
授業メソッド	秘伝的メソッド 徒弟奉公的伝授	ティーチングメソッド 段階的教授	多種多様なメソッド アクセス機会の開放
教師の指示の意味	絶対命令（～せよ） 絶対的強制 指図・問答無用	管理的指示・規則（～することになっている） 規則による強制 説諭・説得	サジェスチョン（～してみたら） 選択肢のひとつ 提案・提示・意見

（資料出所：島田博司『学びを共有する大学授業』30 頁以下玉川大学出版部 2012 年を参考）

無断複製・頒布を禁じます

【大学教育の段階と教師と学生との人間関係】

項　　目	エリート段階	マス段階	ユニバーサル段階
教師像	教授・師匠・師範 名人・達人・指南・大家・学識者・先達・熟練者	大学教師 専門家・指導者・コーチ・インストラクター	友達教師（パートナー） プレゼンテーター・ファシリテータ・サポーター
教師の役割	全人格的・道徳的・知性的 マスター	画一的・学問的・教育的 ティーチャー	流動的・場面的・状況的・文脈的 ジレンママネジャー
学生像	拝聴者・聴講者 学生・弟子 意味の受託者	視聴者・受講者 生徒・教え子 意味の受容者	観客・登録者 学生消費者・客人 意味の享受者・創造者
情報の接受関係	体得者＝継承者 体現者＝伝承者	出力者＝入力者 作者＝読者 発信者＝受信者	サーバー＝クライエント コンテンツプロバイダ＝ユーザー 発信者と受信者の融合
権威的関係	敬意 権威関係 上下関係	尊重 権力関係 ルーズな上下関係	対等 契約関係 ネットワーク関係
数量的関係	1 対 1	1 対多	分対分、多様化・多極化
人間関係の継続性	生涯継続的	限定的	かなり限定的
教師とのつながり	紐帯	連帯・連携	割り切り関係
教師の選択	自己選択 入門・弟子入り	割り当て 入学・適格者選抜	自由選択 希望者登録
教師からの離脱	束縛的 破門・絶縁	自由拘束的 卒業・退学	非拘束的 自由離脱
学生による教師評価	ない	ほとんどない	おおいにある
学生への対応	信頼・信用 受容的		危機管理的・不信 防衛的・防御的

（資料出所：島田博司『学びを共有する大学授業』31 頁以下玉川大学出版部 2012 年を参考）

無断複製・頒布を禁じます